

令和 5 年度

事業所名 : グループホームさくら

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370400426		
法人名	社会福祉法人 憲幸会		
事業所名	グループホームさくら		
所在地	〒023-0003 岩手県奥州市水沢佐倉河字十日市85番地		
自己評価作成日	令和6年1月14日	評価結果市町村受理日	令和6年3月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・バス・トイレ付きの個室となっており、慣れ親しんだ「ご自分の部屋」だと感じられるよう、他社の目を気にすることなく自由に過ごしていただける、ほっとした安らぎが持てるような環境を大切にしています。  
 ・一人ひとりに寄り添いながら、その人らしさを大切にする個別ケアを重視しています。  
 ・広く明るいリビングやテラス等でみんなと集い、会話や笑いが絶えることなく生活に張りを持たせ、  
 ・健康で穏やかに安心して暮らせる居場所づくりや入居者、入居者家族との信頼関係づくり、入居者、職員の垣根を超えた信頼関係づくりに務めてきました。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、東北自動車道水沢ICから車で約6分の民家が点在し田園が広がる地域にある。北側には日帰り温泉施設「さくらの湯」があり、利用者の散歩コースになっている。広い居室には、個室トイレと洗面台が設置され、プライベート空間が保たれている。現在、看取りへの対応はしていないが、普段に協力医療機関と緊密に連携し、重度化しても可能な限り事業所で利用者への支援ができるよう努めている。また、訪問歯科診療を全員が利用するなど口腔ケアの充実にも取り組んでいる。コロナ禍の事業所運営から通常運営へと移行するに当たって、運営推進会議の委員構成や開催内容を見直すこととし、「事業所が避難所機能を持つことの検討」や「近隣住民との連携協力体制づくり」などの議論・検討を始めたいとしている。さらに「利用者それぞれに、その人らしさを大切にする個別ケア」の一層の充実に向けて、新たな体制で取り組もうとしている。今後の取り組みに期待したい。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和6年1月29日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念の共有を図るため法人理念を通用口や事務室、ホールに掲示して常に目に付くようにしている。	事業所の理念「ひとり一人に寄り添い、共に楽しく笑顔になれる生活」を目指し、ホールや玄関、事務室等の確認しやすい場所に掲示して個々の意識を高めるとともに、毎朝10時のミーティングで唱和し理念の共有と実践に繋げている。理念は職員に共有されているとしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で奥州市に多数の感染者が発生、またクラスターも発生しているため、昨年以上に交流が出来ていない。	夏まつりには多くの地域住民の参加があり賑ったが、コロナ禍のため交流の機会は殆ど無くなった。昨年の秋から地区センターを会場とした佐倉河まつりがスタートし、今回、利用者の作品展示は見合わせた。地域交流の再開に向けて、地域住民や利用者とともに検討していきたいとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入所申込みの際に相談等に乗っている。コロナ禍で奥州市に多数の感染者が発生、またクラスターも発生しているため、昨年以上に対応できていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で奥州市に多数の感染者が発生、またクラスターも発生しているため、前年度までは文書での報告・意見を求める形となったが、今年度は運営推進会議の開催方法を見直しているため開催できていない。	会議は行政区長、佐倉河地区民生委員3名、家族代表、近隣住民、駐在所、市長寿社会課職員で構成され、今年度は開催できていないが、今後は新たな構成メンバーの下、テーマを決めた開催、オンライン活用等も含めた会議の見直し・充実に努めることとしている。	運営推進会議は事業所運営等に係る重要な役割があることから、災害対策等も含め地域と一層の連携を図ることができるメンバー構成・体制づくりを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	日頃から各種手続きなど運営や活動について指導を得ている。市からは定期的に広報誌も届いている。	運営推進会議の委員として出席した際には、指導助言を得たり、情報・意見交換をしていた。利用者の要介護認定申請に際しては、窓口を訪問し直接職員に法人の運営状況などを説明し、助言を得ている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行っていない。施設内研修として定期的に身体拘束・虐待廃止について情報の提供を行っている。	身体拘束の排除指針を作成し、職員会議に合わせて3ヵ月毎に適正化委員会を開催している。年2回タブレットを活用したインターネット研修会を実施し、スピーチロックは、言い換えを職員で検討し一人一人を尊重した声掛けを申し合わせている。転倒防止や安全確認を目的に、2名が離床センサーを使用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待を行っていない。施設内研修として定期的に身体拘束・虐待廃止について情報の提供を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見をしている入居者がおり、成年後見制度について管理者が資料を閲覧し職員にレクチャーした。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	重要事項説明書の説明時に不安や疑問点があるかお尋ねし、疑問があれば説明している。契約書で再度十分に説明しご理解・ご了承を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要事項説明書にて明示の他、日々の面会（玄関先のみ）病院受診時・物品補充の連絡時等様々な機会で見聞を聞く機会を設けている。	日用品や衣類の補充に来所の際や、玄関やサッシ越しの面会の機会に意見や要望を伺っている。運営に関する意見要望はないものの「日用品の管理を本人ではなく職員にお願いしたい」との声があり、利用者の状況に合わせ検討している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日のミーティング、不定期開催の職員会議の他、日常的に意見や提案、要望を聞く機会を設け反映させている。	職員会議が不定期開催となっていることもあり、毎日10時のミーティングの時間に意見要望を話し合い、連絡帳で情報共有している。職員間のコミュニケーションは良好で、エアコンの交換や通信カラオケ用機器購入の意見要望を具体化している。	

事業所名 : グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員各自の状況の把握に努め、職場環境・条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人として資格取得への助成を行っている。外部研修がコロナ禍で参加できず、その中でオンライン研修や内部研修を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で残念ながら相互訪問や勉強会は見合わせている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者本人の成育歴・既往症・現況等を把握し、入居前に事前に本人と面談し、困っている事・不安・要望等を聞き、安心して入居してもらえるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に事前にご家族とも面談し、困っている事・不安・要望等を聞き、安心して入居を任せてもらえるように努めている。また病院からの退院の際には担当看護師(医師)医療連携室等医療関係者と退院カンファレンスを行いラポールを構築できるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居者本人の成育歴・既往症・ADL・現況等を元にアセスメント、本人・家族・居宅ケアマネ・退院の場合は担当看護師・医療連携室と情報共有した上で担当者会議を開催し本人と家族が必要とするケアサービスが出来る体制を整えるようにしている。		

事業所名 : グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食事の時は職員も同じテーブルに座り一緒に食事している。また食器拭きやテーブル拭き洗濯畳み等職員と一緒に作業することで連帯感も生まれている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	備品の不足時・病院通院時・急変時は様子を伝達し情報共有、家族に連絡をとり来てもらっている。定期のさくら通信・遠方の家族にはタブレットでのネット面会を活用し絆を切れない様な工夫をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で、馴染みの場所への外出や人との交流ができていない。	盆正月に自宅に連れて帰る息子さんもいるが、面会制限が続き、近親者の記憶が薄れてきている利用者もいる。週1回の訪問看護師や月1回の理容師が馴染みとなっている。家族とラインが可能な場合は、写真や動画を送り、併せて受診依頼や近況報告にも活用している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	精神疾患の方もいるので、不穏になったり、関わり合うのは難しい場合もあるが、体操・カラオケ・トランプ・ドライブ等を実施し、個人個人のマイペースを維持しながら入居者同士の繋がりを保てるように支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も数か月はその後の様子を電話で聞いたり、家族さんの近況を聞いたりしている。		

Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	成育歴・既往症・現況を把握した上で、本人・ご家族の希望や意向の把握に努めている。また、日常の会話を通じて意向・希望を把握できるよう努めている。	利用者が話す「ねしょねしょ、しなしな」は「起こしてほしいとのサインであるなど、積極的に日常の会話や動きを把握し利用者の「〇〇したい」という思いを理解し大切にして、嫌がることをしなくて良かったと思える一日となるよう支援している。	
----	-----	--	---	---	--

令和 5 年度

事業所名 : グループホームさくら

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所申し込み時の家族からの聞き取り・フェイスシート・主治医の意見書・退院情報提供票をもらいこれまでの暮らし方や環境・病歴等の把握に努めている。また、馴染みの物を持ち込んで貰ったり、今までの生活が継続できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日のミーティングでの申し送り・業務日報・個々のケース記録等で現状の把握に努めている。現在、入居者に関する情報の共有を図るため生活支援システムの導入を進めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	新規利用者には入居前に管理者(介護支援専門員)が本人・家族に面談しアセスメントを行い、入居時の介護計画書を作成している 毎日のミーティングでの申し送り・業務日報・個々のケース記録等でモニタリングし現状の把握に努め、必要に応じて居宅ケアマネ・病院の医療相談室とも連携しながら、家族の意向・要望を聞き介護計画書に反映している。	入居時に暫定プランを作成し、1ヵ月後にモニタリングを経て1年間の計画を作成している。随時職員と情報共有や打ち合わせを行い、変化があった場合には、モニタリングやアセスメントを行い計画を変更している。利用者の状態は常に変化していることを前提に、個別の問題に対応する柔軟さを大切にしている。家族には来所時や郵送にて介護計画に同意を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の食事量・水分量・排泄・皮膚状態・バイタル・行動・言動・健康観察を記録し、職員間で情報共有し気づきがあれば逐一報告し周知している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	毎日のミーティングでの申し送り・業務日報・個々のケース記録等でモニタリングし現状の把握に努めているが、コロナ禍でニーズに対応したサービスの多様化にはなかなか取り組めていない。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で地域資源との協働はできていない。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関があり、毎月訪問診療に来てもらっている。また急変の場合は同医療機関に連絡し指示を仰いでいる。救急の場合も対応してもらえるので本人・家族にとって心強い。	入居時に家族の同意と主治医の了承を得て、全員が協力医療機関をかかりつけ医としている。月1回の協力医療機関受診は家族が同行し、対応できない場合には訪問診療で対応している。精神科や皮膚科の受診は家族又は職員が同行し、薬は薬局から届けてもらっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護ステーションと契約し1週間の入居者の健康状態を報告し、週1回訪問看護に来てもらい、健康状態の観察と適宜指導を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	協力医療機関との情報交換や相談は良好な関係を築けている。また、協力医療機関以外でも県立病院・市立病院・医療法人の各医療連携室とも良好な関係を築いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居中に重篤な状況になった場合は、速やかに協力医療機関の主治医・家族に連絡し病院を受診してもらう。その際には主治医から家族に病名や病状の説明をしてもらうと共に、施設でできること、できないことを十分説明し、入院が必要な場合は入院の準備をしメンタル面の支援もできるだけ行うように努めている。	看取り指針は作成しているが、看取りはしていない。月1回の訪問診療と週1回の訪問看護を受けている。重度化や終末期への対応については、主治医や家族と話し合いを重ね、他施設入所、入院などで対応している。今後は、看取りの体制づくりに向け、医師や看護師による終末期の研修を検討したいとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時の対応については、マニュアルを作成しており、オンラインの研修も受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	近隣住民や地域の区長さん、消防署はコロナ禍で参加出来ず、施設内入居者・職員で火災訓練を実施した。	昨年は法人の3事業所合同で火災避難訓練を実施した。夜間一人体制であるが何かあれば他の事業所職員の協力が得られることは心強い。以前台風で法人内の事業所に避難したことがあったが、現在の建物は周辺の住宅地よりレベルが高く、地域住民や法人内事業所の避難場所として活用できるとされている。ハザードマップでの指定はない。	薄暮時での夜間想定訓練の実施や協力体制づくりに向け、近隣住民へのチラシの配布、避難場所としてのあり方等について、消防署等の助言も得ながら、運営進会議で検討されることを期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報の保護に関する規程や運営規程に基づき、人格を尊重し、不快な思いをさせないような声かけを行うよう配慮している。精神疾患の入居者もいることから入居者の声に耳を傾け、大きな声や命令口調にならないよう心がけ、入居者の気持ちや誇りを傷つけないよう、また不安な気持ちにさせないよう支援している。	事業所理念のもとで一人一人に寄り添いながら、その人らしさを大切にできる個別ケアの重視を基本に、それぞれに好きなことができるように努めている。着替えやトイレは居室での対応とし、プライバシーの保持に配慮している。入浴は基本的に同性介助としている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	常に希望や思いを聞く体制になっている。無理じいはせず、入居者の自己決定を優先するように心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援するように心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	出張理髪で定期的に散髪、洋服は本人希望と職員の見立てでご家族に伝え持って来てもらったり、着替えの際は本人に選んでもらったり職員がアドバイスしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者と職員と一緒に食卓を囲み楽しく食事している。また片付けは一緒に行い、洗った食器拭き、テーブル拭きを手伝ってもらっている。	2年前からチルド食品を導入しながら、ご飯とみそ汁、デザートは職員が調理している。月に1、2回、調理師資格をもつ職員が正月のおせち料理や、ひな祭りの寿司等の行事食や誕生会用のケーキを作り喜ばれている。利用者はテーブル拭きや茶わん拭きを手伝い、おやつにたこ焼きや、お好み焼きを一緒に作ることもある。	



令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事携帯はミキサー食・刻み食・普通食と各個人に合った食事形態で出している 毎回の食事量・水分量のチェックをし1日の必要量を確保できるように支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	訪問歯科を利用し口腔ケアの指導・チェック・治療をしてもらっている。毎食後職員が口腔ケアを促し、自力で出来ない入居者には介助、また磨き残しは介助にて汚れや臭いが生じないようにしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各居室にドア付トイレがあり、昼夜自分の居室内のトイレを使用している 失禁の多い方・尿意便意のない方はリハパンやオムツ着用になっているが、定時のトイレ移動・声かげ・見守り等を行い、出来るだけ自力での排泄行為を促している。	昼夜ともそれぞれの居室のトイレ利用を基本としている。排泄が自立している利用者は4名おり、うち布パンツ利用者は2名いる。定期的に声かけしながらトイレに誘導し、特に介助が必要な利用者2名にはセンサーマットを利用し、声掛けをしながら見守りを行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	十分な水分補給・食物繊維・医療との連携による整腸剤や便秘薬の調整をし定期的な排便を即している。また午前午後と体操をし身体を動かすようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	無理強いせず声かけにより2日に1回の入浴を実施。失禁の場合は「身体をきれいにしようか？」と失禁を気に病まない様な声かけでシャワー浴・入浴を実施している。	2日に1回午前入浴としている。入浴を嫌がる利用者には無理強いせず気長に誘導して入浴を楽しめるよう声掛けしている。入浴剤を嫌う利用者があるため、時々ゆず湯とする程度で入浴剤の使用は最小限にしている。常時のおむつ利用者には、毎日シャワー浴をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼夜逆転しないように1日にメリハリを持って過ごしてもらっている。運動やレクをし心地よい疲労感を持って眠れる様に支援、就寝時の声かけは行うが本人次第になっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	訪問診療の医師や訪問看護師、薬局の薬剤師の指導のもと職員間で薬情を情報共有し周知している。また、服薬は朝・昼・夕・就寝前と薬箱を用意しケースに収納し服薬したか職員がチェックできる体制を整えている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居時のフェイスシートや聞き取りで趣味趣向を聞いておりレクや日々の過ごし方に取り入れている。また、役割を持たせ張り合いのある暮らしが出来るよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で奥州市に多数の感染者、クラスターが発生したため、昨年同様戸外の外出は控えている。施設内・近隣への散歩・ベランダでのひなたぼっこ・降りないでドライブだけのレク等を行って来た。	降りないドライブで車窓から景色を楽しんでもらいながら、水沢公園、水沢競馬場、胆沢の桜街道に花見や紅葉狩りに出かけている。天気の良い日は、近隣のさくらの湯のバラ園にでかけたり、プランターの花に水遣りしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設で現金を預かっていない。入居者の希望する買い物は家族に話し、必要があれば立替えて購入するなどしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	帰宅願望がある方、家族に会いたがっている方には家族に電話したりタブレットでネット面会してもらっている。手紙は来ても誰からかわからず捨てようとしたりする。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホールは日差しがふりそそぐ広い空間を保ち、壁には季節ごとのディスプレイをし精神的にゆったり過ごせるような環境にある。ソファも座りごちの良いソファが2つありTVやビデオを観たりカラオケを聞いたりくつろぎの空間になっている。	天井が高く明るい共用のホールには、温かい光が差し込み、廊下は広く開放感がある。テラスやベランダもあり、ホール内には、季節感のある「みずき団子」や「鬼の面」が飾られていた。ソファのあるスペースのビデオから懐かしい歌が流れ、ゆったり語り合える場所や静かに過ごせる場所づくりが配慮がされている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールでは一人で過ごせるスペース・会話スペース等シーンに対応した居場所スペースを作るようにしている。		

令和 5 年度

事業所名 : グループホームさくら

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好み のものを活かして、本人が居心地よく過ご せるような工夫をしている	ご家族にお願いし、家族写真(遺影)・旅行写真 等を飾ったり、使い慣れた家具やお気に入りの 置き物を置いたりし居心地の良い空間を作って いる。	居室には、トイレと洗面台、エアコンが備え付け られており、利用者の身体状況等に合わせ、介 護ベッドやマットレスで高さを調整できるベッドが 配置されている。家族写真や時計、置物、使い慣 れた筆筒やハンガーラック、加湿器等を持ち込み 自分らしい居室としている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づ くり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わ かること」を活かして、安全かつできるだけ 自立した生活が送れるように工夫している	居室は廊下からでもわかるよう名札を立体化、 居室の入り口にはお花の絵、本人が作った工作 を飾っている。台所からホール全体が見渡せ見 守りができるので、入居者が安全に生活できるよ うに支援している。		